

## 科学技術政策担当大臣と有識者議員との会合 議事概要

- 日 時 平成 21 年 11 月 5 日（木）12:50～13:40
- 場 所 合同庁舎 4 号館 4 F 第 4 特別会議室
- 出席者 津村政務官、相澤議員、本庶議員、奥村議員、白石議員、青木議員、藤田政策統括官、岩瀬審議官、大江田審議官

### ○ 議事概要

#### 議題 1. 最先端研究開発支援プログラムについて

<相澤議員より説明>

- （津村政務官）◇ 文部科学省の後藤政務官と新規プログラムに関して話をした際、
- ①内閣府と文科省の横の連携は丁寧にさせていただきたい、その上で、最終的には総合科学技術会議において枠組みを決めさせてほしい、
  - ②時間については、1000億の方ももう少し時間がかかることもあり、あと1か月くらいか、遅ければ年内くらいまでは猶予があると考えている、旨を伝えている。
- （相澤議員）◇ 「若手」「女性」「地方」といったキーワードを設定するのがいいのか、そういう方式をとらないほうがいいのかについて、まず議論したい。
- （本庶議員）◇ 菅大臣がお見えになったときにも出てきているし、一貫して有識者の間でも何らかの形で入れるべきだということなので、このキーワードは必要だと考える。具体的にどういう形で設定するかを決めていただければいいと思う。
- （白石議員）◇ 「若手」には何らかの年齢設定があるが、できる限り高いところに設定した方がいい。例えば40歳ということにすると、場合によってはPh. D. を取って間もない人だけになる可能性もある。
- 「地方」については、日本の場合、トップの4大学くらいと、その次のセカンドティアは国際的に非常に競争力があるが、その次のサードティアのところは特にイギリスなどと比較すると弱いので、セカンドティア、サードティアあたりの研究者を重視する形で「地方」を実質的に担保していくのがいいのではないか。
- 具体的には、応募してきた人たちを、ピアレビューなどでランクをつけ、まず、最初から例えば200人を選ぶ。その次の例えば300人くらいについては、その中からアフーマティブアクションのファクターとして「地方」の考慮を入れた形で選抜していくというやり方があるのではないかと。
- （相澤議員）◇ 「女性」のカテゴリについても「地方」を考慮すべきではないかという点についてはいかがか。
- （青木議員）◇ 女性の進出の方法の1つとして、男性で埋め尽くされていないところに進出するという戦略があり、それを助けることになるので、私個人としては、女性でしかも地方だと特に有利になるというのはいいと思う。
- （相澤議員）◇ 「若手」というグループと、「女性」というグループを設定し、「若手」については年齢の上限をある程度は想定する。「若手」の中には、セカンドティア、サードティアあたりを重視した特別枠を設ける。「女性」については、年齢制限を設け

ず、その中に若手のグループと同様の特別枠を設ける。「地方」というキーワードについては十分考慮するけれども、1つのグループとしては設置しないということについて、合意したい。

- (白石議員) ◇ 年齢制限はないほうがいいが、60歳を過ぎて若手というのもやはりまずいので、私は45歳くらいではないかと考える。50歳でもいいかもしれない。
- (本席議員) ◇ 若手というのを研究者全人口の中の若手とすると40歳以下ということになるが、この予算は自分で立ち立って研究室を主宰している人(PI)にあげるべきお金だと思う。そうすると、平均年齢が大分後ろにシフトするので、上限は50歳でもおかしくない。
- (奥村議員) ◇ 科研費の若手の上限は42歳であり、それを変えるとまた何か説明がいるのではないか。
- (本席議員) ◇ 科研費は42歳で切っていることにより大きな矛盾が生じている。若手の方に資金がシフトして、本来のメインとなるべきところの採択率が下がっており、文科省、学術振興会としても、現在の42歳がいいという考えではないと理解している。弊害が出ているのだから、そこにこだわることはない。
- (相澤議員) ◇ それでは、45歳で1つの上限をつけておくということで、特段の無理があるか。
- (本席議員) ◇ PIを対象にするのか、助教にするのかによっても年齢の分布が全然違うので、そこまで決めた方がいい。
- (相澤議員) ◇ 公募要領には年齢を明示しなければ分かりにくいので、今回はやはり年齢を見るということにして、対象については、評価のプロセスの中でそういうことを重視するかどうかで対応できるのではないか。
- (津村政務官) ◇ 本席議員の言われたように、今回の予算はフォローアップを丁寧にやらなければいけないので、選んだ人が研究の全体像を統括できていないと、責任の所在があいまいになってしまう。
- また、公募要領には書かないが選考の過程で結果的にいろいろと取り計らうというのは、透明性の観点から問題である。表現は考えるにしても、やはり公募要領に何らかの形で書いておかないと説明が難しい。
- (相澤議員) ◇ それでは、対象をPIにするかどうかについては別途議論を積み重ねることとし、「若手」の年齢を決定する必要はあるので、45歳を上限とするということではいかがか。
- (本席議員) ◇ 今意見が分かれていることを性急に決める必要はない。
- (相澤議員) ◇ では、そういうイメージであるということにして、次に対象とする研究分野を設定するかどうかについてはどうか。
- (白石議員) ◇ 科研費と差別化するためにも対象分野は設定した方がいい。政府として推進している「グリーンイノベーション」、少子高齢化・医療問題を重視する観点から「ライフサイエンス」など。
- (奥村議員) ◇ グリーンイノベーションについては、理工系だけではなく、政策提言につながるような実証的な文理融合型の研究も内数として入るようにすべき。
- (相澤議員) ◇ 分野を設定することについては合意したい。支援の規模、件数についてはどうか。
- (本席議員) ◇ 先ほど言った、対象をPIにするということについて、実質的にはその中にある程度の学生やPDが入っているのでグループになるが、代表研究者は一人であるということを進めていけばよいのではないか。
- (相澤議員) ◇ ここは個人かグループかではなく、どの程度の規模にするかということが問題の中心。

- (本席議員) ◇ 支援規模は、1年当たり間接費込みで5000万円、4年間で2億円が上限ではないか。これくらいの規模であれば専念義務をかけられる。
- (津村政務官) ◇ 2億円を上限とする場合、おそらく単純に件数が250件にはならないが、そこは幅をもって考えておくのか、それとも例えば300件として金額の方で調整をする形にするのか。
- (奥村議員) ◇ 全体設計として、まず、いわゆる「若手」と「女性」とに何件くらいずつ割り振るのか、そして、「若手」の中でどういうさらに違いを出すのかといった点を詰めないで今の議論は難しい。白石議員はセカンドティア、サードティアを強くするという話だったが、私はトップティアを強くしたいと考えている。
- (白石議員) ◇ 例えば、全体で350件、そのうち女性枠50件などが考えられる。
- (相澤議員) ◇ 一応の目安ということにさせていただいておく。専門家による評価についての意見はあるか。
- (奥村議員) ◇ 若手の優秀な人にトップティアをさらに上げてほしいという思いがあるので、選考委員をインターナショナルのボードにする、日本人に閉じないという取組をした方がいいのではないか。
- (白石議員) ◇ 私がセカンドティア、サードティアと言ったのは、日本とイギリスの大学の比較をしてみると、日本はセカンドティアのところの大学が少ないので、サードティアのところ盛り上がるような形の配分を、地方枠でやってはいかかということであり、最先端はあくまで維持した上での話ということを一応確認させていただく。  
外国人のトップクラスの研究者にレビュアーをお願いするのはいい。ただし、仮に350件の支援対象に1200件の応募があるとすると、10の分野に分けるとしても120件を見てもらう必要があり、実際には難しいか。
- (奥村議員) ◇ 350件の内数として外国人が選ぶ枠を作り、そこをお願いする形にすればよい。

## **議題2. ●議題2. 研究開発WGの設置について**

<須藤参事官より説明>

- (本席議員) ◇ 方向性はいいが、検討課題をもっと明確にする必要がある。
- (奥村議員) ◇ スケジュールについても、検討課題を踏まえてしっかり検討する必要がある。
- (相澤議員) ◇ 検討課題、取りまとめ時期については更に検討することとし、WGを設置することについて了解いただきたい。

## **議題3. グリーンイノベーションに係る推進方策の検討について**

<相澤議員より説明>

- (奥村議員) ◇ グリーンイノベーションが大きな政策になっていくなれば基本政策専門調査会にきちんとWGを作って議論する方がいいのではないか。
- (藤田統括官) ◇ グリーンイノベーションは、総合科学技術会議の所掌範囲内のみのものでないもので、必ずしも基本計画の策定の議論と同一の枠の中で議論するのがいいのかどうかという点があり、広い形で検討する形にさせていただきたい。
- (相澤議員) ◇ TF、WGを含め何らかの検討組織を総合科学技術会議の下に設置し、状況調査等を行うに当たっては振興調整費の機動的対応を活用することについて承認いただきたい。

(以 上)